熊本県立大学

Thanks 70th

春秋彩

Syunjusai

熊本県立大学広報誌

vol. 46

2017.Spring

特集

熊本地震②～復旧・復興への道しるべ～ …… 2
活躍する卒業生 …… 7
国際交流 …… 8
研究活動紹介 …… 9
地域連携 …… 10
後援会便り …… 11
大学の動き …… 12
活き活き元気種 …… 14
人事情報、義援金 …… 15
おすすめの一冊 …… 15
熊本県立大学アーカイブズ …… 16

春秋彩とは

万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

《特集》熊本地震②　～復旧・復興への道しるべ～

熊本県立大学が挑戦する復興教育

もやいすと 2016　熊本県立大学復興支援チーム

熊本県立大学では、熊本地震の発災を受けこれまで構築してきた地域リーダー養成を目的とする教育プログラム（もやいすと育成システム）を活かし、新たに「復興教育」に挑戦しています。

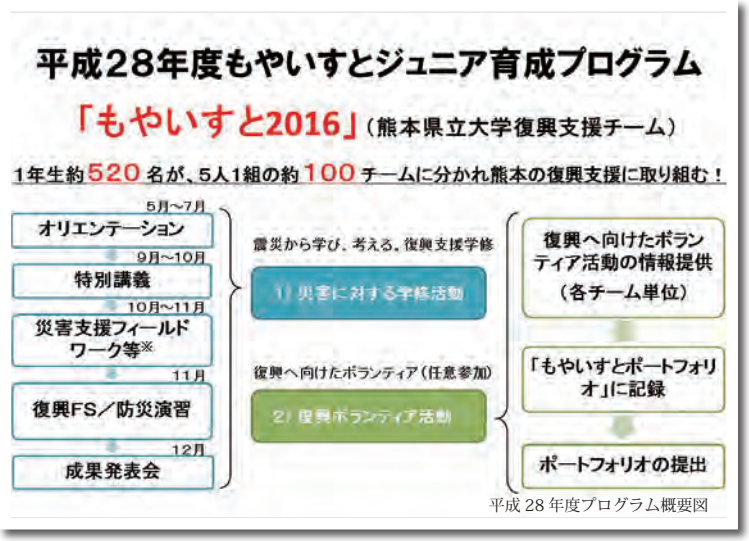
被災地の大学の役割

本学では、地域リーダー養成を目的とした「もやいすと」教育を平成 17 年より始め、平成 27 年度からは全学的な教育プログラムとして再スタートしました。

２ヵ年目となる平成 28 年４月、今年度の準備を進める中、熊本地震が起こります。

地震からの復旧を進める中、被災地の大学の役割を見つめ直し、同プログラムを活かした「復興教育」に着手しました。

復興教育へ向けたオリエンテーションの様子



平成 28 年度プログラム概要図

全学必修のプログラム

このプログラムは、１年生全学必修の授業を中心としており、平成 28 年度は、ジュニア育成のプログラムを全ての１年生が受講したことになります。

授業では、１年生約 520 名で、104 チームを作り、熊本の復興へ向けた学修活動をスタートしました。

その１年生に対しては、上級生※がサポートする学修環境を整えています。

※「もやいすとシニア育成」を受講する２年生及び３～４年生からなるＳＡ（Student Assistant）の学生

ミニコラム　実は、前年度からスタートしていた

もやいすと（防災）ジュニア育成

平成 27 年度より、新たに防災をテーマとした授業として「もやいすと（防災）ジュニア育成」を開講しました。同授業では、防災に関する専門家の講義に加え、学内での防災演習を実施。１年生約 260 名が受講しました。

防災演習では、防災ゲーム「クロスロード」や救急救命訓練に加え、大学が避難所になった想定での、避難所設置・運営訓練を実施しています。

翌年、直ぐにその学びを実践するとは…。改めて「防災教育」の重要性を痛感しました。

写真左　：日本防災士協会熊本県支部との避難所運営ゲーム（HUG）
写真右上：熊本 YMCA との避難所設置・運営訓練
写真右下：日本赤十字社熊本県支部との救急救命訓練

熊本県立大学が挑戦する復興教育 ～ もやいすと 2016 ①～

復興教育の展開

熊本地震の発生

5 月

チームビルディング
メンバーの心をひとつに

7 月

上級生（シニア）による
サポート体制の構築

夏休み

夏季休業中、学生達は
ボランティアへ参加

10 月

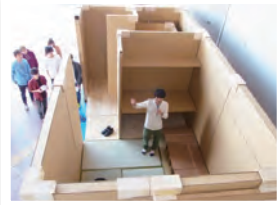
上級生（シニア）による
仮設団地聞き取り調査などを実施

授業再開

熊本地方気象台長をはじめ
特別講義を実施

11 月

仮設団地
みんなの家での講話



専門性を活かした仮設住宅
模型作成ワークショップ

仮設団地での各種支援活動を実施

アリーナはじめ学内全域を使用した
約520名での防災演習

被災状況の専門調査
への協力

ミニコラム 伝えるという支援

復興教育かわら版

早期に復興教育をスタートするにあたり、当初は広報活動を重視する余力はありませんでした。しかし、活動を進めるうちに、「伝える」ということが一つの支援なのだと分かりました。

情報社会の現在、支援の手が広がる一方で、風化も始まっています。その中で、最も身近な被災地の大学が、復興を担う学生達への教育を進めていること。その歩みが「伝わる」ことも、希望や安心に繋がります。

復興教育かわら版は、仮設住宅を中心に配布させて頂いています。

熊本県立大学が挑戦する復興教育 ～ もやいすと 2016 ②～

復興フューチャーセッション 防災ゲーム「クロスロード」

11 月 23 日､約 520 名で実施した防災演習では、上級生が企画した復興フューチャーセッションを実施、また阪神淡路大震災を経て考案された防災ゲーム「クロスロード」を熊本地震版として実施しました。この演習を経て、成果発表会へ向けた準備が始まります。

左写真：アリーナを会場としたフューチャーセッションで話し合う様子。
下写真：クロスロードの司会をする上級生の様子。

複数用途に使える段ボール製の椅子を発表するチームの様子

104 チームでの成果発表会

12 月 24 日、今年度本プログラムの締め括りとなる成果発表会を開催しました。テーマは「仮設住宅の暮らしを改善するプラン」です。プランの発表は、それを具体化するための道具（千円以下で作成可能なもの）を考案することを条件に実施。多様なアイデアと道具に基づいた発表から、最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞を決定しました。

ボランティアステーションの活動

震災発生直後から、本学の多くの学生たちが様々なネットワークを通じて、ボランティアとして被災地支援の活動に参加したことから、学生たちの主体的なボランティア活動を支援するため、昨年８月、学内に「ボランティアステーション」を開設しました。ステーションでは、ボランティア活動に関する情報やその共有の場を提供しており、本学の学生ボランティア活動に役立っています。

県外の大学からのボランティア受入窓口の役割も果たしており、昨年は常葉大学の益城町避難所におけるカフェや小学校での学習支援活動に参加するなど、他大学と協力し被災地支援に取り組みました（写真左）。

９月　常葉大学 Thunder Birds の皆さんとの記念撮影

９月　くまもと GINGA-NET プロジェクトとして全国の大学生と合宿しながら活動を行いました。 最終日、修了書を手に記念撮影。

復興支援に向けた研究活動の推進 ～「地域志向教育研究事業」による熊本復興～

本学では、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（大学ＣＯＣ事業）」の一つとして、教員が地域課題の解決や社会貢献につながる教育研究テーマに主体的に取り組む「地域志向教育研究事業」を進めています。熊本地震の発生を受け、今年度、震災復興に寄与する研究テーマを重点的に取り上げた研究活動を推進しています。

平成 28 年度地域志向教育研究事業による復興支援関連研究

	研究テーマ	研究責任者
1	県内市町村における人材育成推進のための研究制度の構築について－課題解決能力及び非常時対応・危機管理能力を備えた職員の育成	総合管理学部 教授　三浦　章
2	震災復興・地域活性化を目指す【県産麦パートナー強化推進事業】への学生参画による実践型教育研究事業	総合管理学部 教授　丸山　泰
3	震災後の地域産業の創生－農事組合法人の現状と課題－	総合管理学部 教授　森　美智代
4	被災地における組織運営のあり方―熊本地震における公民協働―	総合管理学部 准教授　澤田　道夫
5	震災復興と総合管理 ―熊本地震を機とした総合管理型教育の推進―	総合管理学部 准教授　山西　佑季
6	熊本地震後の管理栄養士の医療・保健・福祉・教育分野における活動に関する調査・研究	総合管理学部 教授　南　久則
7	集落の復興に向けた記憶の記録「集落の復興カルテ」に関する研究	環境共生学部 准教授　柴田　祐
8	大空間避難所施設の居住快適性と災害避難施設のライフライン強靱化とその定量評価に関する研究	環境共生学部 准教授　田中　昭雄
9	住まい力を育てる住教育の実践と教材開発	環境共生学部 准教授　佐藤　哲
10	熊本地震による緊急環境汚染調査	環境共生学部 准教授　阿草　哲郎

「県内市町村における人材育成推進のための研修制度の構築」

県内各地の復興活動に従事する市町村職員を支援し、危機管理能力等を向上させるための研修を実施。

「住まい力を育てる住教育の実践と教材開発」

「震災」「文化財」「復興」をキーワードに、文学部、環境共生学部、総合管理学部が連携し、被災したジェーンズ邸のペーパークラフトを製作し、被災文化財の復興につなげる活動を行った。写真はジェーンズ邸の模型。

「震災後の地域産業の創生～農事組合法人の現状と課題～」

被災した嘉島町で６つの集落営農組織が統合して発足した九州最大規模の農事組合法人「かしま広域農場」の経営復興支援をテーマに、本学の学生、教員、高校生や社会人が参加して、研究会を開催。

理事長寄稿「大災害の時代に生きる」

熊本県立大学理事長
五百旗頭　真

阪神淡路大震災で自ら被災

今から21年前の1995年1月17日午前5時46分、M7.3の凄まじい殺意を持った揺れが我が家を襲いました。その揺れは20秒程度であったにもかかわらず、3分程度痛め続けられたように感じました。この阪神淡路大震災により、兵庫県西宮市の我が家は全壊となり、広島大学の教員時代に親交のあった方のお言葉に甘えて家族を広島に避難させました。1ケ月経過したのち広島へ訪問すると、赤いランドセルを背負った末娘が近所のお姉さん達に連れられ、一緒に楽しそうに小学校へ向かう姿を見て、思わず涙を流しました。そのとき全国の人が神戸を支えてくれていると感じました。

この経験を端緒として、外交安全保障が専門の私が「防災・減災」を第二の専門とすることになりました。そしてまず多くの人々や後世に向け、神戸で起こった記録を残す活動を始めました。

東日本大震災では復興構想会議議長に

東日本大震災は、防衛大学の校長をしていた2011年3月11日に発生しました。阪神淡路大震災の復興に関わったからでしょうが、私は当時の菅直人内閣総理大臣から復興構想会議の議長に任命されました。会議では、全国民が被災地を支える支援の枠組みを作るとともに、「高台移転」と「多重防御」の組合せなど、次の津波に備える、より安全・安心なまちづくりなど、被災地の継続的な再生プランを作りました。

熊本地震の特徴

今回の熊本を襲った地震は、「下から上に跳ね上げる縦ずれ」の阪神淡路大震災に対し、横ずれにより「前後上下左右」の目まぐるしく振り回す揺れでした。前震（M 6.5）に引き続き、より大きな本震（M 7.3）が来るという、地震の常識を覆すものでした。

阪神淡路大震災では、自衛隊は初動の遅れから非難を浴びましたが、3期目が始まる瞬間に地震に遭った蒲島知事は、自衛隊派遣の要請を速やかに行い、自衛隊は大きな役割を果たしました。幸運にも市内に自衛隊の駐屯地が密集している熊本では、阪神淡路大震災の教訓から「FAST-Force」と呼ばれる緊急事態に備えた自衛隊の出動体制のおかげもあり、犠牲者を最小限に止めることができました。

『くまもと復旧・復興有識者会議』座長が考える創造的復興

蒲島知事から求められ、「くまもと復旧・復興有識者会議」の座長として、私は熊本地震からの復興について提言を行いました。その骨子は、“Build Back Better” つまり “創造的復興” です。具体的には、まず熊本の中心市街地から空港までを発展の中軸にしていくことです。街と空港を結ぶ地域を発展させながら復旧を進めていくと、面目を一新することができるのではないかと考えます。しかしこれには大きな財源が必要であり、国がそれをサポートしていく必要があります。

次に九州の東西軸の強化です。九州の南北軸は新幹線や高速が既に整備されていますが、東西軸は国道57号線一本しかない状態です。熊本から大観光地である阿蘇へのアクセスはもとより、大分や延岡間の高速道路網の建設は、広域防災及び創造的復興には欠かせません。

最後に、被災市町村が連携した、復興ミュージアムの建設です。神戸市には、「人と防災未来センター」という阪神淡路大震災を追体験できる施設が作られ、現在全国から小学生を含め集まってきます。これは社会教育としても重要なもので、熊本でも是非実現して欲しいものです。被災者による「生きててよかった」と書かれた短冊を見たことがありますが、現実はいばらの道であり、生活再建はなかなか思うようにできません。くまもとの復興に関しても、まだ多くの支えが必要ですが、その中でも「生きててよかった」と思える熊本となりたいと願います。

活躍する卒業生

全日本空輸株式会社

客室乗務員

尾田 有希 さん

平成22年3月
総合管理学部総合管理学科卒業

失敗を怖れず新しいことに果敢に挑戦を

2010年にＡＮＡの客室乗務員として入社し６年半が経過しました。国内を始めアジアやヨーロッパなど国際線に乗務し、忙しくも充実した日々を送っております。

飛行機には様々な思いや価値観を持ったお客様がご搭乗されます。国籍も文化も言葉も異なるお客様との関わりは、お客様に寄り添い、日本の航空会社だからこそできる「おもてなし」がお客様に伝わった時、とてもやりがいを感じながら日々乗務をしております。

私は現在、国内線のチーフパーサー資格や国際線ではビジネスクラスパーサー資格を保有しフライトを纏める責任者として乗務に励んでいます。ご搭乗頂いたお客様にご満足頂けるサービスとは何か、一緒に乗務する仲間と知恵を出し合いながら考えることで、チームワークが生まれます。チームで得た経験や感動は次に繋がる原動力となっております。また去年から新入社員の教育担当として後輩の育成にも携わっております。

色々なものに興味や関心を持ち取り組むことが好きな私ですが、熊本県立大学の総合管理学部で様々な分野について見聞を広め、学園祭実行委員会で「ミス・ミスター白亜コンテスト」のチーフとして企画を取りまとめた経験が現在の業務にも繋がっていると思います。

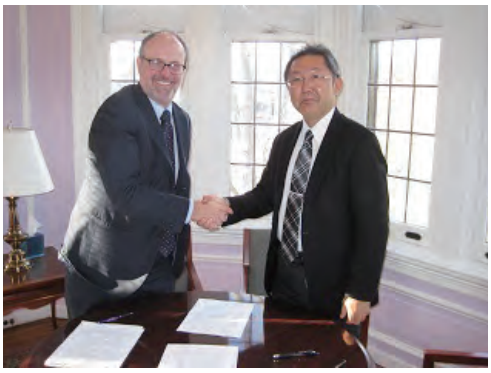
大学生活は長いようで本当に短いので、失敗を怖れず新しいことに果敢に挑戦していってください。実り多い学生生活になりますことをお祈りしております。

国際交流
-International Exchange-

米国・チャタム大学と学術交流協定を締結

昨年11月29日(火)、本学は米国・チャタム大学(Chatham University)と学術交流協定を締結しました。半藤英明学長がレイヴィン英語英米文学科長とともに同大を訪問し、デイヴィッド・ファインゴールド学長と学術交流協定に署名しました。今後は文学部英語英米文学科が中心となり、学術交流だけでなく、学生交流として学生の派遣(毎年2名程度を予定)を相互に交流を展開していく予定です。高い学力と語学力が求められる大学との交流を通して、世界を視野に入れた学生たちの育成と学術向上を目指します。

【チャタム大学の概要】
大学名:チャタム大学(Chatham University)
所在地:米国ペンシルバニア州ピッツバーグ
創　立:1869年
学生数:約2,100名
分　野:科学、犯罪学、教育学、人文、ビジネス、コミュニケーション、健康科学等



水銀研究留学生 ホアン・ティ・ヴァン・アンさんが 国際会議において ポスター賞を受賞

昨年11月13日～16日に北九州国際会議場で開催された「第5回妊娠前・胎生期・小児期における環境と発育・健康影響に関する国際会議(PPTOX V)」において、本学水銀研究留学生の ホアン・ティ・ヴァン・アンさん(写真中央)がポスター賞を受賞しました。

ベトナム出身のホアンさんは、国立水俣病総合研究センター(水俣市)で研究中であり「加熱気化原子吸光分析を用いた海産物の筋、肝臓と生殖腺におよぼす水銀およびメチル水銀の分析」についての成果を発表しました。

～熊本地震で感じたこと～ 「多文化共生留学生シンポジウム」で 本学留学生が発表を行いました

昨年12月10日(土)、熊本市国際交流会館で開催された「多文化共生留学生シンポジウム」(主催:熊本留学生交流推進会議)において、本学の留学生2名が 「留学生に聞いてみよう!～熊本地震で感じたこと」というテーマを日本語で発表しました。県内の大学から留学生6名、本学からは環境共生学研究科博士前期課程1年・徐士昊さん(中国出身)、同研究科後期課程3年・呉嘉喩さん(台湾出身)が登壇し、それぞれの思いを伝えました。

研究活動紹介

『João Rodriguez ARTE GRANDE の成立と分析』と『マクナイーマ』

文学部　教授　**馬場 良二**

平成元年に熊本女子大学に赴任し、もう28年が経ちました。日本語学校に7年間勤めていましたから、外国人に日本語を教えるのには慣れていましたが、日本人相手に、それも、教授法を教えるのには慣れていませんでした。また、その頃の日本語教師養成にはまだ方法論がなく、手探りでした。

国内での教育実習が230名、韓国祥明大學校226名をはじめとする、中国、タイ、台湾、トルコ、米国、イタリア、インドネシア、ポーランドの海外での実習生が369名、計599名の実習を指導、実現させました。卒業論文は149、修士論文が54、博士の学位は2名です。

今では、上級生が下級生の面倒を見、放っておいても、学生だけで指導案の作成も、受入れ先との交渉もやってのけます。研究室の一つの完成形です。何もないところから、ここまでになったのは、偏に学生たちのおかげです。

私の学部の専攻はポルトガル語で、修士課程で日本語学を学びました。

『João Rodriguez ARTE GRANDE の成立と分析』(2015年、風間書房)は、2013年に出身大学から学位をいただいた論文です。João Rodriguezは16世紀に日本で活躍したイエズス会士で、ARTE GRANDE は彼がポルトガル語で書いた日本語の文法書です。この本は世界に2冊しか残っておらず、1冊はオックスフォード大学のボドリアン図書館にあり、もう1冊はスコットランドのクロフォード伯爵の所蔵です。ボドリアン本は公開されており、マイクロフィルムで研究できますが、クロフォード本は公開されていません。論文執筆の際に伯爵の許可を得、保管しているエジンバラの図書館まで見に行きました。論文提出後、さらなる研究に必要な4ページ分のスキャン画像も送ってもらいました。無事に本になると、図書館と伯爵に贈りました。すると、驚いたことに伯爵本人から礼状がとどいたのです。高齢の自筆は、ふるえていました。ひどく感激し、2016年の9月、ファイフのご自宅、バルカレス邸に伺いました＊。伯爵にはお会いできませんでしたが、跡取りのバルニエル卿がお茶を淹れてくれました。

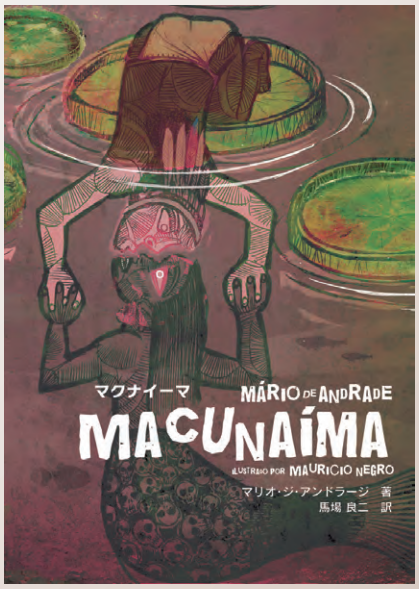
大学院のとき、ブラジルに2年間留学しました。そのとき、知った文学がMario de Andradeの『マクナイーマ』です。これは、1928年に発表されたブラジル近代文学の金字塔と言われる作品で、インディオの男性、マクナイーマの冒険譚であり、先住民の文化とヨーロッパの歴史、アフリカの信仰からなる近代ブラジルの神話世界と現実を織りあげた物語です。5年の歳月をかけて翻訳し、ブラジル新鋭の画家Maurício Negroの表紙と挿絵でかざりました(2017年、トライ出版)。大学の図書館にあるので、手にとってご覧下さい。書店では、上通りの長崎書店だけに置かれています。興味のある方は、amazon.comでも。

＊道中の様子は、私のフェイスブックに掲載しました。

クロフォード伯爵のバルカレス邸。この建物の一階にある図書室で本を見せていただきました。

アマゾンの闇から生まれ、遍歴の旅を経て、天に登って星になるまで
――ブラジルの国民的英雄の目くるめくオデッセイ。
インディオの伝統と20世紀初頭のモダニズムが火花を散らして出会った。
ポルトガル語に精通した日本語学者によるみずみずしい訳文が、読者を変幻自在な魔法の世界へ運び去る。読みだしたら、あなたはもう帰って来られない。

(東京大学教授・文芸評論家　沼野充義氏による「帯文」から)



『マクナイーマ』の表紙

地域連携

創造的復興支援プロジェクト・シンポジウム～復旧・復興に向けた大学の役割～

熊本地震以後の様々な震災復興支援活動であり、文部科学省のCOC事業の一つとして、昨年11月5日、大ホールにおいて標記シンポジウムを開催しました。くまもと復旧・復興有識者会議の座長を務める五百旗頭理事長や阪神・淡路大震災後に継続的な復興支援や防災教育に取り組む兵庫県立大学の森永速男教授による基調講演をはじめ、本学の教育や研究、ボランティア活動の報告、益城町の西村町長や熊本YMCAの神保事務局長を招いたパネルディスカッションを行いました。

会場に集まった300名を超える参加者において、「地域に生きる」大学として熊本にどのような貢献を果たしていけるのかについて考え、復興支援への機運を高める貴重な機会となりました。

郷土の懐かしい味を共につくる「郷土料理教室@仮設住宅」

昨年12月10日、大津町室仮設団地において、「くまもとふるさと食の名人」の指導のもと、入居者をはじめ本学学生・教職員が参加のうえ、郷土料理である「お姫さんだご汁」、「いきなりだんご」の調理や会食を行いました。

震災発生から時間が経つにつれ、避難者のニーズは心身の健康へとシフトしてきています。「初めて集会所に来たが、たくさんの人と話すことができ、とても楽しかった」などの声が入居者から寄せられるなど、学生と入居者が共に触れ合うことにより、仮設住宅での入居者の精神的癒しとコミュニティ形成につながったようです。

企業ニーズと研究シーズのマッチングのためのラウンドテーブル

昨年12月2日、八代市アグリビジネスセンターにおいて、「あなたの食品も機能性食品になる？～食品のもつ機能性の適切な選び方と活用法」と題したセミナーを開催し、県南地域の食関連企業や行政関係者20名が参加しました。本学では、八代市を中心とする「くまもと県南フードバレー構想」の支援を進めており、その一環として、標記セミナーの開催など食関連企業のニーズと本学のシーズのマッチングを図り、新たな事業展開や商品開発を促進しています。

講師を務めた環境共生学部 友寄博子准教授が、加工品だけでなく野菜にも栄養成分や機能性を表示することで、消費者ニーズの高い「機能性食品」として付加価値を高める方法について、実例をもとに分かりやすく講義を行いました。講義後は、友寄准教授が企業と共同研究した商品や参加者が開発した商品の試食会を行い、活発な質問や意見が交わされました。

COC+事業シンポジウム「第1次産業の競争力強化と6次産業化による地方創生」

雇用創出と若者の地元定着をめざす、文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の一環として、昨年12月9日、メルパルク熊本において、関係者学生など約140名が参加した標記シンポジウムを開催しました。

内閣府「まち・ひと・しごと創生会議」有識者委員である山本眞樹夫氏の基調講演や、産学官連携の事例報告が行われました。また、大学、行政、産業団体、企業等が参加したパネルディスカッションでは、1次産業と大学や企業等が連携することによって拓かれる様々な可能性について活発な意見が交わされました。

減災型地域社会のリーダー養成プログラム 最終成果報告シンポジウム

昨年12月16日、熊本大学工学部百周年記念館において、本学をはじめ県内の4大学が平成24年度から連携して取り組んできた文部科学省の標記大学間連携共同教育推進事業の最終成果報告会が開催されました。

各大学による熊本地震に際して発揮された学生たちの自主活動等の成果報告では、関係機関から高い評価をいただきました。

各学長によるパネルディスカッションでは、減災教育を高等教育だけでなく、初等教育や地域へ還元していくことが今後の検討課題との提言がありました。

後援会便り

後援会とは

●本学学生の保護者又はこれに準ずる方を会員として組織されています。
●大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果を上げることを目的としています。

後援会では、学生活動支援事業として、各サークルの活動、白亜祭(学園祭)の開催、九州地区大学体育大会(インカレ)出場等に必要な費用に一部助成を行っています。写真(左)は、昨年11月12日(土)、13日(日)に開催された第52回白亜祭の一コマです。特設ステージを飛び出しての様々なパフォーマンスに加え、各サークルの展示発表や出店も大盛況で、白亜祭を通して熊本地震を乗り越えようとする本学学生の熱意が感じられる2日間でした。

後援会の事業

次の4つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

《就職対策事業》
●就職対策講座(公務員試験対策講座、就職活動実践講座、ITパスポート試験対策講座、二級建築士受験対策講座、簿記検定試験対策講座の助成又は開催経費の助成
●PROGテスト(社会人基礎力の測定)の実施支援、TOEIC®IPテスト開催の支援及び受検料の助成、各学部による就職支援事業開催経費の助成、資格取得者への助成　等

《教育研究推進事業》
●共同自主研究への助成
●インターゼミナール大会等への参加助成　等

《国際交流推進事業》
●海外留学・研修期間に応じて渡航経費等の助成
●留学対策講座の受講料の助成
●協定校研修団への授業・日本文化紹介等経費の助成　等

《学生活動支援事業》
●各サークルの活動費・白亜祭開催経費・全国大会出場経費等の助成
●学生用コピー機の設置、コピーカード販売
●学生のリクエストに応じ図書を購入し図書館へ配置
●防犯対策用ブザーの無料貸出　等

※新入生へは、本学合格通知の際に、後援会の説明及び入会・会費納入のお願いをしております。
まだ未加入の方は、充実した学生生活を送るためにも後援会事業を御理解いただき、是非御加入ください。途中年次であっても随時入会を受け付けています。

熊本県立大学国際関係シンポジウム2016「アジア太平洋の中の日本外交」を開催

五百旗頭理事長コーディネートによる外交・国際関係の第一人者が熊本に集結のうえ、昨年11月４日(金)ホテル日航熊本において、国際シンポジウムを開催しました。

当日は、平日にもかかわらず本学学生のほか、県民の方々をはじめ県内外から約 500 名の参加があり、動乱の時代を迎える世界情勢と日本の進路に係る最新かつ重厚な討論が行われました。

プログラム	○　基調講演　宮本 雄二元駐中国大使 ○　パネルディスカッション 五百旗頭真　熊本県立大学理事長（コーディネーター） 宮本 雄二　元駐中国大使 田中 明彦　東大教授、前 JICA 理事長 細谷 雄一　慶大教授

宮本雄二氏

五百旗頭真
理事長

田中明彦氏

細谷雄一氏

本学と福岡女子大学が日本語日本文学分野における学術連携協力協定を締結

１月19日(木)、本学は福岡女子大学と日本語日本文学分野における学術連携協力協定を締結しました。相互の更なる発展を目指し、学術の進展と人材の育成に寄与することを目的としています。

調印式は本部棟大会議室で開催され、本学から半藤学長及び鈴木文学研究科長が、福岡女子大学から梶山学長及び今井副学長が出席しました。

今後、講師の相互派遣、共同でのシンポジウムの開催その他、学生の教育研究、教員の研究交流などの連携を行っていくこととしています。

「Kumamoto Earth Quake Project（KEQP）」共同調査報告会を開催

研究目的が異なる大阪大学、熊本大学、横浜国立大学及び熊本市国際交流振興事業団（KIF）と本学が共同で、熊本地震により被災した外国人や支援活動をしたボランティアや阿蘇観光施設関係者へ聞取調査をした結果について、１月29日(日)小ホールで、将来の多文化共生社会構築推進へ向けた提案の発表、報告会がありました。

当日は共同調査の活動報告のほか、本学学生 GP の４テーマの活動報告や KIF の活動報告、「KEQP 共同調査をとおして考える今後の多文化共生社会とは」と題したパネルディスカッションが行われ、約 30 名の参加がありました。

文学部・木村洋准教授が第38回「サントリー学芸賞」を受賞！！

昨年12月12日(月)に東京で行われた授賞式において、文学部の木村洋准教授の著書『文学熱の時代―慷慨から煩悶へ』（名古屋大学出版会）が第38回「サントリー学芸賞（社会・風俗部門）」を受賞しました。

サントリー学芸賞は、「政治･経済」「芸術･文学」「社会･風俗」「思想・歴史」の４部門に分かれ、毎年出版された著作物を対象に選考、広く社会と文化を考える、独創的で優れたものを顕彰しております。

特別減免―熊本地震により被災した世帯の学生の授業料等減免を実施―

昨年４月に発生した熊本地震により保護者等学資負担者が被災し、経済的に修学が困難となった学生を支援するため、平成 28 年度授業料の特別減免を実施しました。

学資負担者の居住する家屋が一定以上の被害を受けた場合や、死亡・失業等により学資負担者の収入が著しく減少した場合を対象とし、被災状況に応じて授業料年額の全額又は半額を免除しました。（＊申請受付は終了）

また、平成 28 年度に実施した入試において、学資負担者が被災した入学志願者を対象に、入学選抜手数料及び入学金についても全額又は半額の免除を行いました。

軟式野球部主将浦田駿さん 日本代表選出！！

本学の軟式野球部主将の浦田駿さん（総合管理学部２年）が、大学軟式野球の日本代表 24 名の中に選ばれ、昨年 12 月９日～ 11 日にグアムで開催された国際親善大会で走攻守にわたり大活躍しました。

日本代表選考会は５月の第１次書類選考に始まり、８月の京都で行われた第２次選考合宿での実技審査 78 名から勝ち残るという狭き門で、九州では浦田さんが唯一選出されました。

文学部フォーラム「英語を学ぶ～みつけてみよう、あなたの学習法～」を開催

文学部では、昨年10月29日(土)中講義室2において、英語を学ぶ効果的な学習方法について考えるフォーラムを開催し、学習者個人の実践例やこれまでの英語教育の研究成果などを紹介しながら、学習者にあった英語学習方法を考えました。

「私が見つけた英語学習法」をテーマとした発表のほか、高瀬敦子国際多読教育学会理事による、「私の英語学習法」と題した基調講演や、「４つのスキルを伸ばす英語学習法」をテーマとしたパネルディスカッションが行われ、参加者は、英語を身に付ける効果的な学習法について学びました。

蘆花研究プロジェクト「鼎談（ていだん） 蘆花と漱石」を開催

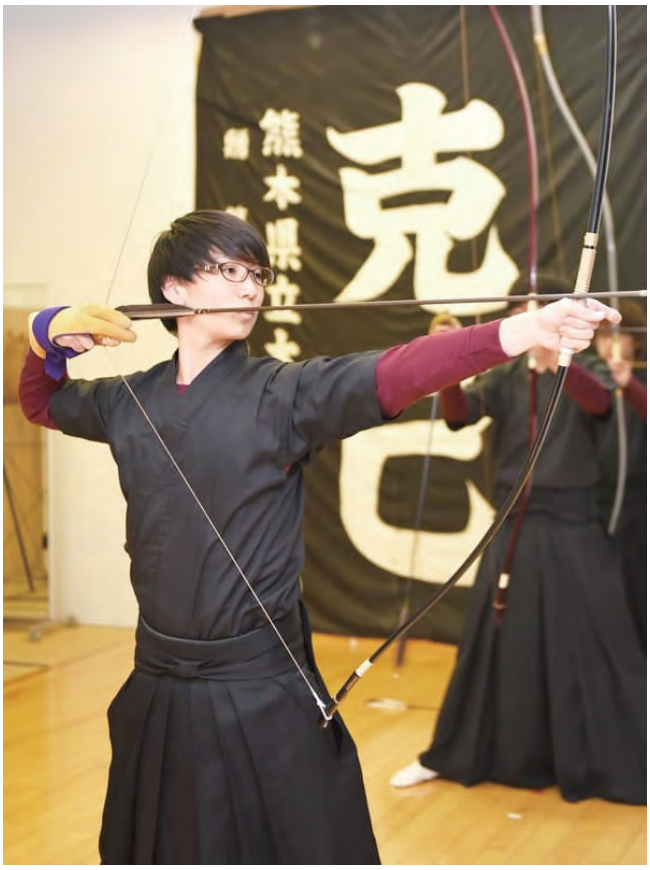
昨年10月22日(土)講義棟１号館１番教室において、「鼎談 蘆花と漱石」を開催。

半藤学長の進行のもと、布川純子神奈川工科大学非常勤講師及び木村洋本学准教授が、ほぼ同年代である徳冨蘆花と夏目漱石について教員経験や英語への関心、新聞との関係など共通点の多い作家として、熊本の地をめぐる縁とともに論じました。両者の人生を通じ、明治の作家のあり様や表現活動の意味などを浮かび上がらせました。学生 26 名、一般 99 名の計 125 名の参加がありました。

活き活き元気種！

このコーナーでは、
地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。

弓道部活動報告



弓道部主将　総合管理学部2年　**出口　史也**

私たち熊本県立大学弓道部は、現在2年生9名、1年生10名が所属しています。練習は週に4回行っており、週に1回は外部から師範を招いて指導を受けています。「克己」を部のモットーとして、大会での団体入賞、個人入賞を目標に、日々練習に励んでいます。

大会は年に5回程度あり、その他にも交流戦や練習試合などがあるため、1年を通して充実した活動をしています。3年生は昨年10月に開催された「全九州学生弓道選手権大会」で引退となったため、私たちの代に引き継がれて、まだ数ヶ月と間もない状態です。そのような中、12月に「九州学生弓道新人戦指宿大会」が行われました。3年生が抜けた穴を少しでも埋められるように、我々2年生が今まで以上に気を引き締め、1年生もこれまでの練習の成果が発揮できるよう大会に臨みました。団体戦は男女とも決勝リーグ進出まであと一歩という非常に惜しい結果となりましたが、個人戦においては、男女1名ずつ3位入賞という大変すばらしい結果を残してくれました。自分としても、主将として迎えた初の大会であり不安も多くありましたが、幸先の良いスタートになったと思います。次回の大会は、2月末に行われる「南九州学生弓道選手権大会」です。前回の大会で見つけた課題を克服し、さらに良い結果が残せるよう、また練習に励んでいきます。

各部員は、異なる学部で県外生や一人暮らしの者も多く、アルバイトもしているなど思うように部活に参加することができない人もいて、全員が揃って練習することが難しい環境となっています。そのため私は主将として、たとえ結果を残すことができたとしても、部員同士の心が離れたり、気持ちがすれ違うことのないよう、部員一人ひとりと向き合っていくことを大切にしています。

熊本地震に伴う義援金の報告

今回の熊本地震に対する本学の被災に当たり、次の方々から義援金をいただきました。

この場を借りまして御寄付者の御芳名の報告と、温かい御支援に感謝を申し上げます。

なお、この義援金は、主に本学施設の復旧や、被災した学生への支援等に大切に活用させていただきます。

御寄付者御芳名（H28.9 ～ H29.2）

（敬称略）

- 祥明大學校総長　丘　冀憲
- 佐野　浩子

※　熊本県立大学未来基金へ平成 28 年度に御寄付いただいた方の御芳名につきましては、次号（第 47 号：平成 29 年秋発行）に掲載させていただきます。御了承くださいますようお願い申し上げます。

人事情報

採用（平成 29 年 4 月 1 日付）

[文学部]		
英語英米文学科	教　授	虹林　慶
英語英米文学科	准教授	石井　佳世
英語英米文学科	講　師	原　紘子
[環境共生学部]		
居住環境学科	准教授	鄭　一止
食健康科学科	講　師	坂本　達昭
[総合管理学部]		
総合管理学科　情報管理ｺｰｽ	准教授	森山　賀文

就任（平成 29 年 4 月 1 日付）

総合管理学部総合管理学科　情報管理ｺｰｽ長	宮園　博光（兼任）
キャリアセンター長	津曲　隆（兼任）

昇任（平成 29 年 4 月 1 日付）

文学部	教　授	石村　秀登
環境共生学部	教　授	柴田　祐
総合管理学部	准教授	井寺　美穂
総合管理学部	准教授	本田圭市郎

退職（平成29年３月31日付）

文学部	教　授	村里　好俊
文学部	教　授	田﨑　權一
文学部	准教授	水尾　文子
文学部	准教授	坂井　隆
環境共生学部	教　授	北野　直子
総合管理学部	教　授	松岡　泰
総合管理学部	准教授	土居　俊平

おすすめの一冊

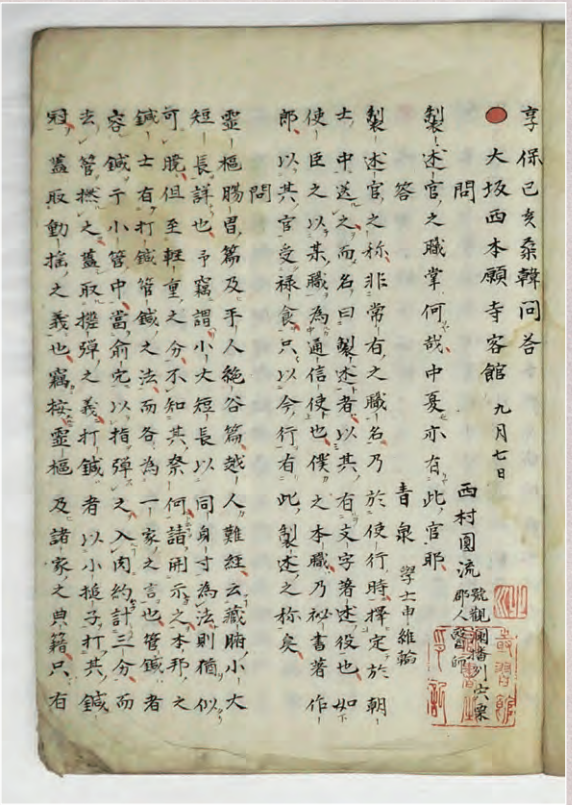
井上達夫・著
『世界正義論』筑摩選書 0054
筑摩書房・2012 年
本体価格 1800 円
ISBN978-4-480-01558-7

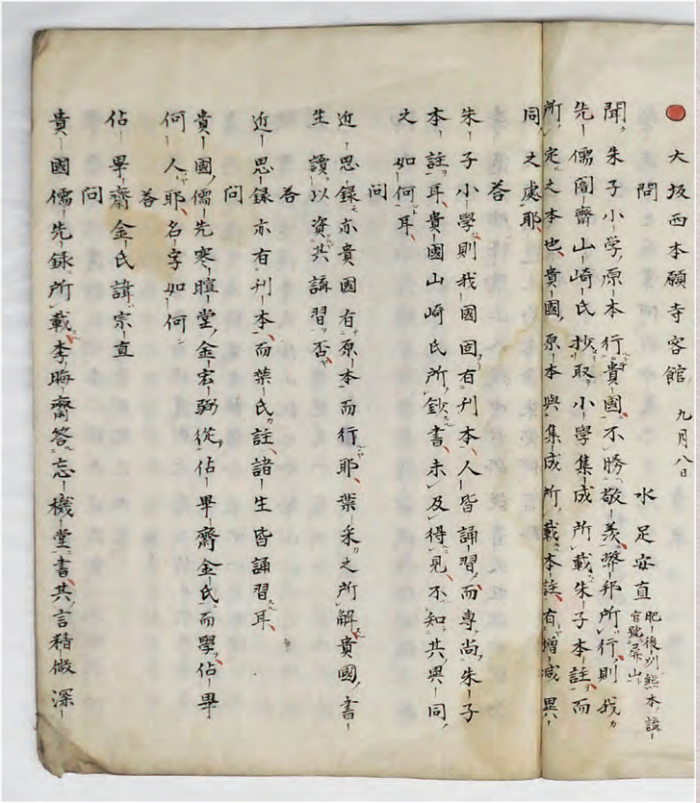
「現代のグローバル化した近代市民社会における“正しさ”を考える」

2016 年、イギリスは国民投票により EU からの離脱を決めた。また 2017 年、アメリカではトランプ大統領が誕生した。世界は少しずつではあるが、しかし確実に動いている。科学技術の進歩に伴い、私たちの生活が、私たちとは遥かに隔たる地での出来事によって、強度の違いはあれ、何らかの影響を受ける、そういう時代を私たちは生きている。現代は、ひと、もの、かね、そして情報が、時によっては瞬く間に移動する、そんな時代である。フォーリーブスは、かつて「地球はひとつ」を声高らか歌った。「America First」は正しいのか。地球規模で影響しあう現代世界を前にした「正義／不正」を問う、この問いを担うのが本書である。私たちはこの問いの前に立たされている。

総合管理学部
教授　江﨑　一朗

熊本県立大学アーカイブズ





享保己亥 桑韓問答

江戸期の本邦文人にとって、朝鮮通信使一行との交流は自らの学問の水準を測る絶好の機会であった。書名に見える「桑」は「扶桑（＝日本）」。本書は享保４己亥（1719）年の西本願寺他における本邦文人と通信使製述官等との問答を収録したものである。ここでは巻首（左）と熊本藩の儒者水足安直（＝屏山）による11項に及ぶ問答の冒頭部（右）を示した。同様の記録は諸書に残るが、本書は「時習館/蔵書之/印記」の蔵書印に見るとおり、熊本藩校時習館の旧蔵書である点が興味深い。

安直の西本願寺訪問は自身の問答よりはむしろ、同伴した13才の息子水足博泉が通信使一行と交わした漢詩の唱酬によって世に知られる。通信使製述官の申維翰が博泉の詩才を絶賛したことで、博泉の名は荻生徂徠や伊藤東涯といった当代一流の学者の耳にも届くこととなった。但し、問答を収めるという性格上、本書には博泉の活躍の跡は見えない。

博泉はその学才が災いしてか、藩内の風評芳しからぬ点があったともいわれ不遇な最期を遂げている。一方、父が交わした問答は肥後の儒学者の面目を施す偉績として藩校に受け継がれていたのである。

解説：文学部　教授　米谷 隆史

「春秋彩」へのご意見・ご感想をお待ちしています。
本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報紙編集の参考にさせていただきます。
〒 862-8502（住所記載不要）
熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
FAX 096-384-6765 E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行：熊本県立大学
〒 862-8502 熊本市東区月出 3 丁目 1 番 100 号
TEL 096(383)2929（代）
http://www.pu-kumamoto.ac.jp